ヘンリー・ジェイムズの『荒廃のベンチ』における真実と誤解

藤　田　榮　一

ヘンリー・ジェイムズの『荒廃のベンチ』は1909年から1910年にかけて『パトナムズ・マガジン』誌に発表され，その後彼の短篇傑作を集めた選集に収録された，彼の最晩年の短編小説である。彼の晩年の最高傑作である『使者たち』，『鳩の翼』，『黄金の盃』が，1903年，1902年，1904年に出版されていることを考えると，この作品が文字通り最晩年の作品であり，短編としては彼の最高傑作であると評されるのも当然であるという感が深い。そこには彼が作家として体験し，また人生の全てのものが渾然一体となって凝縮されているといっても過言ではない。しかも，その評価が年を経るに従って高まっているという驚くべき事態が生じている。

この作品を最も早く，的確に評価したのはアメリカの文学批評家エドマンド・ウィルソンで，その「ヘンリー・ジェイムズの曖昧性」と題する論文において，「『荒廃のベンチ』はヘンリー・ジェイムズの全作品の中で，最も美しく書かれ，見事に展開された作品の一つであり，彼が出版したこの最後の作品は平凡で小さな古本屋とイギリスの海辺の行楽地の元家庭教師の間の孤独と貧困の詩のようなものである。(1)」と，この作品がジェイムズの最高傑作の一つであり，詩の段階にまで高められた散文であると明確に指摘している。ジェイムズ自身は彼の創作過程を記した『ノートブックス』で，この作家の創作のアイデアを

(1) Edmund Wilson: "The Ambiguity of Henry James" (1934) in *The Question of Henry James* (New York, 1973) ed. by F. W. Dupee, p. 187.

他の作家の作品をヒントとして完成したことを明らかにしている。(2) この作品の主人公ハーバート・ドットは気品があり，紳士としての高潔さや態度物腰を誇りとして生きている。彼は父親の残した古本屋を彼なりの気概をもって経営するものの経営手腕や能力の不足により，経営不振におちいり，妻と二人の娘を貧困のために十分に尽してやることもできないままに死に至らせるという孤独と貧困に苦しむ人物である。彼がこのような状況に至ったのは，彼が愛し婚約していたケイト・クッカムが急に下品で醜悪で高圧的な女性のように感じられ，彼が一方的に婚約を破棄した。それを怒って彼女は彼に400ポンド婚約違約金を請求するという事態が生じたことを発端としている。この状況は作品冒頭で次のように描かれている。

この前会ったときの恐ろしい会話のなかで，彼女はそれとなくその意図を，浅ましく下司で下卑た威嚇の言葉を，事実上伝えていた。だがそのときは，勇気が，あるいは自信が――もう少し好戦的だったら自分の立場の強みと自負したにちがいないものが――まだ残っていたので，取りあわないのが最善の策だと思ったわけだった。だがこんどは気づかないではいられなかった。いや，気づかないふりをするのは無理だった。情容赦なく彼女の口から突いて出る，醜い，恐ろしい言葉は――なんと言うか――いわば，挑戦のしるしにするのにはもってこいの恐ろしいものを引っぱり出そうと，ポケットに突っこんだ手の指のようだった。

「3日以内にあなたから大変違った返事がいただけなければ，私は問題を事務弁護士の手に移します。興味がおありでしょうから言いますけど，私はもう弁護士と相談ずみなのです。ハーバート・ドッド，私は，私の名前がケイト・クッカムなように間違いなく，“婚約不履行”であなたを訴えます」

この通り，あからさまで烈しい言葉だった――だがそれでも，この言葉を聞

(2) Henry James: *The Notebooks of Henry James*, ed. F. O. Mattiessen and Kenneth B. Murdoch, (New york, Qxford Univ Press, 1947) pp. 220-223.

いてしまうと，いや，まだ聞いているときから，まるで電燈がぱっとついたように，この言葉が自分自身の正しさをなによりはっきり照らし出してくれたと自分に言えるような気がした。ほら，この通りの女だ。生れつき下品で，粗野で，本質的に意志過剰で，良心が欠如しているのだ。こういう恥ずかしい脅迫ができる女だからこそ，私が彼女の正体を思い知って自分の一生を彼女に結びつけるのがいやになると，それを私の犯罪にしようというのだ。だがなにより明瞭で，無気味なのは，彼女の意志の紛れもない現実性だった。自分の言い分を十二分に検討していた。いまわしい，うわべはいかにも尤もらしい，自分の言い分の勝ち目を計算していた。万事が四流なのに迅速さだけいつも一流のプローパリーの町で得られるかぎりの最高の助言を，彼は確信できたが，彼女は受けていた。つまり，彼女が訴訟に持ちこむのはへどが出るほどたしかだった。そのうえ，頭が切れて抜け目がなかった――ある意味で間違いなく玄人だった。そうでなかったら，あまり魅力的でもないのに，どうして私がひっかかっただろう？　彼は，もしも彼女が訴訟に持ちこんだら，かならず勝つだろうという間違いない事実に目をつむることができなかった。彼女は勝てるということを知っていた――はっきりと。そしてその自信が，だから，彼女の残忍さのまさに証拠だった。彼女が彼を愛しているようなふりをしていたことは，どちらかと言えば，たいしたことでなかった。そんなふりをした女はほかにもいた。ほかの女たちも実際そんなふりをしていた。だが彼女は法廷での汚ならしいことを，たとえば，損害を言い立て，鉄面皮な嘘を並べ，キスしたことをさらけ出し，卑猥な哄笑のなかでラヴ・レターを読みあげたりといったことを，敵意をかきたてる快い刺激剤として，行動にかきたてる強烈な刺激剤として，楽しむことができるような女でいながら，私が彼女を愛するのは当然で安全で幸運なことだというふりをしていたのだ――それはまた彼の言い分の正しさを立派に証明していた。裁判といった手口を想像できるだけでも，と彼は自分に言い聞かせた，女の場合は大きな意味を持つかもしれないことなのだ。実際なんと恐ろしいことを思いつけるものだろう！　なんと恐ろしい本性だろう！

彼が弁護士を雇って訴訟にもち込めば必らずしも，それほど高額の違約金を払わず和解できたかもしれないが，あえて彼女の要求を受け入れて，270ポンドまでは何とか支払った。しかし，その後彼の生活は貧窮そのものの状況に陥り，彼はケイトとは異質の優しく可憐なナン・ドリアリと結婚し，二人の娘をもうけたが，その生活は家族を貧困の苦難におしやって死なせてしまうということになった。彼は400ポンドのうち200ポンド以上の支払いについてはびた一文も支払うとはしなかった。というより払おうとしても支払える経済状態ではなかったのだ。こうしてドットは家族もなく孤独のうちに古本屋は倒産し，彼も薄給の勤め先をさがしてやっと糊口をしのいでいるという有様であった。彼のわずかな慰めはナンとともに海辺のさびしいベンチに坐って，ただ漠然ともの思いにふけるというだけであった。それにしてもケイトは何故あんなに怒り違約金を請求し，彼を苦難につき落としたのか，不思議といえば不思議だった。それほど深く彼を愛していたから，その裏切りに腹を立てていたのであろうか。しかし今は零落し，貧窮の極みにあって孤独でわびしい生活を味わいつくしている彼には全て過ぎ去ったことであり，今さら，そんなことはどうでもよかった。彼は自分が人生の敗残者であるという現実を荒廃のベンチで一人さびしく味わって坐っているだけだった。

そんなある日彼がいつものようにベンチに坐っていると優雅で上品で裕裕な別世界の女性が彼から，それほど遠くないところに来て彼を見つめているのに気がついた。彼女は気品があり，容貌も美しく，上流社会の淑女らしい雰囲気を漂わせていた。明らかに彼とは縁なき衆生といった感じだった。何気なく彼女をみて話しかけようかと彼が躊躇したとき，彼はその女性が他ならぬ，あのケイトであることに気づいた。それにしても何という変りようであろう。それは，彼が嫌悪し，忌みきらっていた高圧的で下品で高慢な女性ではなく，気品が高く，優雅で，美しい上流社会の淑女の姿そのものであった。

そう，彼女は遊歩道をはさんで，だが彼と向かいあって，私はあなたに用が

あるのですと率直に語りかけるように，はっきりと，彼の方を向いて立っていた。それに彼女は――そう疑いようもなく――本物の淑女だった。押し出しの非常に立派な，身分のありそうな中年の女性で，ま新しい白いキッドの手袋を別にすれば，全身を地味な，だが「しゃれた」黒で包み，彼女の顔にふさわしい，まっ白な，しゃれた，点模様のある，よく似合うヴェールをつけていた。そして視力の弱い彼でも，そのヴェールの奥に，意志の強そうな美しい黒い眉とすぐにそれと分かる性格の強さを見てとることができた。だが，彼女は青ざめていた。黒い眉はそれを引き立てるヴェールのためますます濃い黒に見えた。

＊　　＊　　＊

彼に近づいてくると，かなりの間隔を置いて彼と並んで（ああ，彼女は恐ろしく思慮深かった！），どんなに自分が変ったかを鮮明に――だがまたそのためそれだけ十分に，堅苦しく，儀式ばって――見せつけて，すぐ彼女と分からなくても当然な理由をはっきりさせた。彼女はただもう別人，昔とはまるでちがった人間だった。そしてその違いをそんなに厳粛に不安そうにさらけ出したのはすべてどうやら――彼女が近づくのを一応彼は受けいれたのだから，いや，受けいれているように見えたのだから――彼のためだった。彼の記憶にある彼女は太りぎみで，優雅さを欠いた女だった。だがいまの彼女はやせた，上品な，やつれた，ほとんど憔悴した――だがその憔悴を豊かに身につけたさまざまな作法の力とでも言うもので補っている――淑女だった。彼女は，そのかぎりの意味でだが，奇妙に年とっていた――いろいろなことに出会ってきたように，経験が顔に現われていた。顔はひきしまり，はりがあり，立派になっていた。目が美しいのは昔も，最初から，認めていたにしても，こんな沈んだ色で輝いていただろうか？　それに，少し言えば，彼女は貫録ができていた――彼はそんな風に感じて，少したじろいでいた。彼女はある生活を，生涯を，歴史を生き抜いてきていて，いまはじっと待っているような緊張しているような様子を見せていても，奥深くに自信のようなものを秘めているのが感じられた。彼女には貫録ができていた，そう貫録ができていた――尤も，そんな風に感じたか

らといって，それをこれ見よがしに見せつけられているように感じたというのでもなかった。そういうわけで，彼女が彼の心によみ返らせたのは呪いの言葉ではなかった。彼女はむしろ，彼が言ったにちがいない言葉で言えば，遠い昔の問題を水に流させてしまったのだった。ふたりの間にふたたび関係が生れ始めたこの異様な瞬間――どのくらいの長さ，いや，短さだったのだろう？――は，むしろ新しい可能性のための瞬間だった。

驚いたことに彼女は今頃になって彼と和解したいと申し入れてきた。彼女はこの行楽地の最高級のホテルに泊っているから，ある日時に彼とゆっくり話をしたいので訪ねてきて欲しいと懇願した。彼はそれを受け入れることにした。その理由は今さら彼女に払う金は１銭も無いし，和解することによって何らかの償いができるかもしれないし，もはや彼女と争って人生を拓り開く気概も失っていたから，彼女の言分を受身になって聞いてみるしかないという心境に彼が達していたからである。約束の時間にホテルを訪ねてみると彼女に追従し，あわよくば結婚の約束をとりつけようと戦戦兢兢とせんばかりの様子を示している堂々たる大尉を追い返す一方，ドットがきてくれたことを心からよろこんでいる彼女の姿があった。彼は残金はもう払えないと宣言すると彼女は意外にも，そんなことは期待していないと言い，それどころか彼が支払った270ポンドは自分が運用し，1200ポンドに増やしたから，いつでも引出して使えるようにしておきましたと言って預金引出し書類を彼に渡そうとしたのである。彼はその金額が莫大であることに驚き，そんな金は受け取れないと拒絶して返そうとする。

彼女の説明によると彼女は彼を深く愛してきたから誰とも結婚せず，彼から受取った金は全力を尽して運用し，彼が人生に苦しみ，その真実を悟り，より積極的に生きることができるように長年努力を続けてきたというのである。彼女は心底彼を愛していたから，思い切った行動をとり，彼が人生の実態に目ざめ，自分の行動を理解できるようになったから，彼の前に姿を現わし，拒絶さ

れることを覚悟したうえで，彼の支払った金を利息をつけて増額し，返済したいというのである。

彼が今になってわかったことは自分が彼女を誤解し，人生を醜悪なものと諦めて貧窮と孤独に甘んじてきたのであり，いまさら急にこんな提案を受けても，直ぐに承諾できるものではないと実感し，返事もしないままでホテルをとび出し，帰路についた。それから1週間ほどして縁なき衆生であるという諦観に身をゆだねて，いつもの荒廃のベンチに来て，一人で坐っていた。すると，もう去ってロンドンに帰った筈のケイトが，まるで彼を待ちかまえていたように姿をあらわし，放心状態で坐っている彼をだきかかえて一緒に坐った。彼はそれに身をゆだねる他にどんな対応もできなくなっている。ケイトは自分を嫌悪し，自分を捨て，自分を憎み，貧窮と孤独の諦観の人生にあったドットに愛の真情をつらぬき通して彼を救出した。ここには，ジェイムズが好んで描いた消極的で無為の人生をおくり，貧困と孤独に生きる人間に，それと反対の積極性と愛と忍耐をもった人間が苦難のはてに自分を捨てて逃げた人間を愛の力によって救出するという奇跡的な展開を，その最晩年の作品によって示したという事実がある。この作品は読者が読めば読むほど，涌きあがってくる感動に素直に身をゆだねるしかないというジェイムズの人生観の総括を示唆したものだといえるだろう。

ジェイムズは，その作品の技法として，主人公以外の傍観者を「私」として登場させ，その「私」の視点で物語の進展を観察するという方法を最高度に発展させ，この「視点」はジェイムズが確立した小説の技法として喧伝されている。これは作者の神に似た人間の運命を支配する立場と違って，作者が一方的に登場人物の行動や思考をあやつるというものではなく，読者も「私」の語る物語の内容を読者自身の立場で解釈することをゆるす曖昧性を残している。この視点の技法によって，その作品解釈に多様性を生みだすということがジェイムズ文学の特徴であり，そこに作家としての彼の独特の存在意義があるとも言いうるものである。この作品では主人公ドット自身が自らの体験を物語るとい

う形式をとり，ジェイムズの作品にしては珍らしく，その作品解釈を一元的なものにしているとも言えるかもしれない。しかし，より客観的にこの作品を見てみると，ジェイムズ自身が初期の作品『アメリカ人』について，この作品はアメリカ人ニューマンの立場から見てきたが，彼の結婚しようとしたフランス貴族であるサントレ夫人の立場もあり，彼女の立場から，この物語を見てみることも意義があることだと述べているようにドットではないケイトの立場から，この物語をみるという逆の立場も当然考慮に入れなければならないだろう。その他にもいろいろの視点があり，ジェイムズの作品を専門家としての批評家の立場でみるという批評家の視点もある。これらの他に一般の読者が批評家の専門的な視点ではなく，より自由で拘束されない立場で作品を考察するという視点もあり，この視点こそ一般の読者にとっては重要なものであるといえるだろう。

ドットの視点については，ほぼ見てきたが，彼が自ら語っていない事実もある。それは彼がケイトを嫌う潜在的な原因になっていると考えられるものだが，彼には経営者としての実務能力に欠けているところがあるということである。このため彼はケイトに本能的な反発を感じざるを得なかったという考え方もある。これは，彼が古本屋を経営しても経営不振におちいり，尾羽打枯らすまでに貧窮に苦しみ，妻子も養ないかね，死なせてしまうという作品の展開に明確に示されている。彼は実務的経営能力の欠落した人間である。資本主義社会の競争において落伍者になるのが彼の宿命である。彼には精神的な強靱さや行動力や積極性に欠けたところがある。彼には経営者としてのリーダーシップも経営能力も希薄である。彼は世俗的世界では成功しないかも知れないが，高潔で紳士らしい矜持はもっている。したがってケイトのような実務的能力の優れた女性に反発し，自分と同類のナンを好むのも彼の資質からして当然の成行である。彼は妻となるナンについては，こう感じている。

彼はどんなときでも夕日が非常に好きだったし，ナン・ドルーリィも夕日が

好きだった。だが同じように見てとったのだが，ミス・クッカムには，言うまでもなく，夕日はなんの感銘も与えなかった。彼はこの威圧的な女に，ほかにもいろいろ教えたが，少し夕日にも目を向けたらと教えたものだった。だが彼女は見向きもしなかった。その〈地の果て〉（〈ランズエンド〉の地名を少し大げさに解釈して言えば）は彼女が求愛期と称していた時期――いや，より正確に言えば，彼女がこの上もなくあからさまに破廉恥に彼に迫った時期――の大半彼らふたりが過ごした現場だった，いや，それ以上人目につかない場所もそれ以上の便宜もなかったので，そこを現場にするよりほかになかったのだ。だがまた同じようにほかには行き場がないので，彼が美しい，おとなしい，気立てのやさしいナンからときどき慰めてもらったのもそこだし，また，これまで優雅に牽制しあって行儀よくしてきたのと同じように不思議なことだったが，ついに，なにもかもか捨てた自暴自棄の愛で，まったく向こう見ずなロマンチックな愛で，毒気にみちた現実から逃げ出そうとするように死に物ぐるいで彼女を愛し始めたのもそこだった。

*　　*　　*

話しかけると桃色に染まってくるナンの顔，歯のきれいさを考慮にいれても少し開きすぎている唇，目の美しさを考慮にいれても少し開きすぎている瞼，それらはみんな絶対的信仰を集める蠟製の聖母像を思わせたが，まるでぴんと張った絹の枕に頭をよこたえたときのように彼の熱い絶望感を冷やしてくれるのに大いに役立った。たしかに，聞いているうちに肌がむず痒くなって，内側からぽつぽつ小さな穴が開いてきそうな陳腐な決まり文句や聞きあきた標語ばかりナンが口にするのは事実だった。だがそうした事実にもかかわらず，彼は彼女といると楽しかったし，彼女のそばにいたかった。彼女の作法と本能が，世間にあまり類がなくても，たいへん気持のいい，彼の作法と本能とに明らかに似通ったものだからだった。だがまた打ち型で刻印したようにはっきり彼女の体に浮き出ている先天的な優雅さと，どこにいてもみんなにだれだろうと思わせる，どことない，後天的な，洗練された優雅さ――帽子，ヴェール，羽毛

のえり巻き，しゃれた傘の握りなど――のため，つまり，神さまから授かった，本物の，卓越した特質のため，彼女は彼以上に低俗さを我慢できなかった。

だから，たとえば――彼自身は君が私の心を少しでも占めるようになったのは私がもうひとりの女をそこから排除しようと完全に腹をきめた後だったのだと強く主張しても――ナンはいつまでもこの苦労はみんな，彼女の言いかたで言えば，あなたが私の生活のなかに入ってきた時期が間違っていたからだと言いつづけた。だがたとえそうだとしても，それくらいのことは，たいへんな苦境に落ちこんだいま，彼には大したことでなかった。

彼は何故ナンを気に入り，すぐ結婚したのだろうか。それはナンの女性的な優しさや受身で彼の言うままになる受身にある弱さにあるといってよいだろう。ナンは受身で弱い人間である。彼女はケイトと違って行動力も積極性も無く，経済力のないドットを受け入れて結婚し，彼が経営不振に陥っても，それを見守っているだけで，家事に専念し，子供とともに病死する。たしかに現代のように女性が社会的に活躍できない社会的風土がなく，経済的に女性が夫の事業を支援することも困難だったことが推察される。彼女はケイトのように頑健ではなく弱々しいところがある。それにドットは彼女が専業主婦に専念していられるほどの経済力もなく，彼女と子供に貧窮の苦難を与えるだけである。

彼の唯一の美点はどんなに零落しても人間として高潔で紳士らしく矜持を保ち，人間としての自己の精神に尊厳をもって生きてゆこうとする姿勢である。彼は自分を客観的にみて，人生経験から人間としての悟りとも言える諦観に達している。この諦観が他人の支援に身をゆだね，自己自身を救出させる人生観を生み出していることは否定できない。この境地にあったために彼はケイトについての自分の誤解を悟り，ケイトの真実の姿を客観的な立場に立って理解することができたのだある。そこにジェイムズの到達した最後の人生観がある。

ドットの視点とは別のケイトの視点からこの物語をみるとどうなるだろうか。彼女が何を考え，相手の言動にどう反応したかは直接語られていない。したが

ってドットが実際に自分で見て，体験したと感じた彼女の言動から，それを判断するしかない。最初彼はケイトを愛し，二人は相思相愛の状況になったのだ。そこで婚約したのだから，二人が愛し合っていたことは間違いない。ところがドットは一方的に婚約を破棄し，ケイトは失望落胆し，自分の愛が報いられないことを知り，その反動として憤激したと考えられる。深く愛していた人が突然自分を嫌いになったと言われ喜ぶ人はいない。もし心から相手を愛していなければ，かえって良かったと思うかもしれない。ところが実際を数十年も経っていたのに独身を守り，彼を救おうとしているのだから彼を深く彼女が愛していたことは立証されている。

彼女は憤激のあまり婚約破棄の違約金として400ポンドを要求し，ドットが拒否すれば裁判を起こすとまで言って，270ポンドまでの支払いを受けた。これは彼女の怒りが激しいものだったことを物語っているが，それだけの事態を意味しているとは考えられない。彼女は400ポンドの請求のうち，彼が270ポンドまで支払い，それ以上はもう支払えないと通告してきたとき，暗黙のうちにそれを承諾し，それ以上の請求はしていない。ケイトはドットが気品があり，紳士的で高潔な精神の持主であることを熟知し，その容貌や態度物腰や行動の仕方は気に入っていた。つまり，彼女は彼の裏切りにもかかわらず，彼を深く愛していたのである。その反面客観的で冷静に彼の人間性をみていたのだ。彼は精神的には高潔で，弁護士を雇って彼女の賠償請求に裁判で応訴するような人物ではないことを見抜いていた。

彼が資本主義社会の弱肉強食の拝金主義の世俗的な現実世界で，利益をあげるために悪刺な方法を使ってまで，商品の価値以上の価格で売りつけたり，誇大広告をして消費者を欺すことを常套手段とする類いの経営手腕を発揮できる人物ではないことも見抜いていた。こんな彼が事業に従事しても，正直一辺倒なやり方では，やがて経営不振におちいり，倒産する可能性が強いことまでも見抜いていたのである。

人間社会では他人と親しくつま合い，その言動を観察していると何となく経

営手腕が秀れているとか，判断力が的確であるとか，真面目で堅実な人物であるとか，信頼できるとか，浪費家で努力も忍耐力もないから，やがて経済的に破綻するだろうというようなことが判ってくるのと同じである。成功する人は若い頃から何となくわかるものである。もっとも成功しても上司にはへつらい，部下には峻厳で世渡りは巧みだが，人間的には尊敬できないという類いの人物もある。この場合のドットは人間としては高潔で紳士的ではあるが事業で成功できるような狡猾なところもある人間ではない。こんな彼は結婚し，妻子を得ても，やがて事業不振におちいり，その結果経済的に妻子を支えることができず，倒産し，貧窮の生活の辛酸をなめ，最後には孤独な境遇になるかもしれないと，ある程度まで彼の人生を予測し，彼の境遇をじっと注視していたのである。

一方自分は海辺の小さな行楽地を離れ，イギリス最大の都市であるロンドンに移り，社会の最低の女中から身を興こし，収入はすべて蓄えにまわしながら，淑女としての気品と身なりと容貌を維持し，人間的にも社会的にも充実した生活を志した。収入を巧みに運用し，それを銀行に預けて増額し，ドットの270ポンドには全く手をつけず，それを1200ポンドにまで増やしている。仕事の面でも次第にその能力を発揮し，人々に尊敬され，名実ともに淑女とみなされる人物に成長している。それにともない，かつてのとげとげしさは影をひそめ，優雅で気品のある態度や物腰につけ加えて上品な容貌の女性へと変身をとげている。

ケイトは積極的で行動力があり，直接描写されていないものの明らかに経営手腕もあったから長年の間に，それが自然に発揮され，ドットの支払った270ポンドを1200ポンドに増やすことはもちろん，それ以外にも余裕をもって生きてゆける資産を築いていることが作中の状況から客観的事実としてうかがえる。しかし彼女は上流社会の人だけしか宿泊しない行楽地の一流ホテルに泊るのはドットに会うときだけで，普段は質素な生活をしていると彼に告げている。彼女は富裕であるように見えても，贅沢三昧の金満家のような生活をしているの

ではなく，質素な倹約生活をし，いつでもドットの貧困な生活と自分の生活を融合させ，ドットにひけ目を感じされないような生活をするように心掛けている。

ドットがケイトの一室を訪ねたとき，そこに彼より早く陣取っていたロウパー大尉は尊大で社会的地位をひけらかし，他人を見下す威厳を発散させ，ケイトが自分と結婚するのが当然だというように振舞っている。ところが意外にもケイトは，あの人はうんざりしており，あんな人と結婚するつもりはないとドットに明言している。このような彼女の言動からわかることは，彼女はドットが婚約を破棄し自分を嫌悪するようになっても，なおドットを秘かに愛し続けているということである。たとえ自分が拒否され，追払われても，なお一方的にドットを愛し，その愛が報いられることが無くてもなお彼を愛し続けている。これは赤子に対する母の母性愛にも通じるもので，しかも男女間の恋愛という本質も力強く残している。別れて数十年たってもかつての相手のことを想い，愛し続けるというのは尋常ではない。恋愛においては，愛を拒否されると一時的に相手を恨んだり，憎んだり，自分が自殺をはかったり，相手を殺そうとしたりする突発的行動に出るようなことがあっても，別れて数十年も相手を愛し続けることは少い。普通の人間は自分の愛が報いられないことがはっきりすれば，現実的対応として別の人をみつけて結婚し，相手のことは時間の経過とともに忘れてしまうものである。ところがケイトはそうではない。

長年の間，ドットがどのような境遇になり，どんな状態になっても依然として彼を愛し続けている。その愛は少くとも間接的にしか判断することができないにしても，深く大きいとしかいいようがない。別な表現をすれば，それは人間離れのした愛であるといえる。しかし，それは聖人の人類愛というようなものではなく，人間の愛であることは間違いない。それはロウパー大尉の求婚したいという態度を受けいれ難い，いやなものとしてはっきり拒否しようという姿勢をしめし，あの人は嫌いだと極めて人間的な態度をみせてドットにそれを明言している彼女の姿にはっきりとみられる。

しかし，その愛は仔細に考察してみると，普通の水準の人間的な愛をこえた宗教的愛といえる境地に近いものである。彼女の愛は深く大きいことは誰にも理解できる。しかし現実のケイトは聖人とはほど遠い，普通の人間として描かれている。これはジェイムズが聖人の言動や人生を描こうとしたのではなく，ごく普通の人間の平凡な行為のなかに人間の常識をこえる超人的な愛が存在することを自分が命をかけてとり組んできた文学という枠組のなかで示唆しようとしたものだと理解することができる。ジェイムズは晩年の傑作『初老』のなかで死の床にある作家デンクームをして『僕らは夢中で仕事をしている――力のあるだけのことをしているんだ――もっているものだけしか出せないんだ。僕らの疑いは情熱であり，僕らの情熱が仕事なんだ。そのほかのことは芸術の狂気だ』として芸術家の魂を披瀝している。ジェイムズは狂気のような愛の継続と発露を，この作品のなかで存分に示唆し，その愛の力によって，人生に挫折し，不毛の生をおくっているドットをケイトに救済させるという奇想天外な小説として結実させている。これがケイトの愛の真実の姿である。

これらの作品中の主人公と女主人公の立場からの視点の展開に対し，ジェイムズの作品を専門家として研究している批評家の視点が存在する。それらはどのようなものだろうか。『荒廃のベンチ』に最も早く注目し，それを高く評価したものとして著名であるのは，アメリカの優れた批評家エドモンド・ウィルソンによるものである。その後この作品は年を経るにしたがって，その評価が高くなり，最近ではジェイムズの短編小説として最高傑作であると述べている批評家が増えている。

しかし短編だということもあり，殆んどの研究者がその著書の１，２行で軽く触れているだけで，この作品だけに的を絞って本格的に論じているものは極めて少ない状況である。これはジェイムズの後期の三大傑作や『ある貴婦人の肖像』，『ねじの回転』，『聖なる泉』，『アメリカ人』などについて数10頁，場合によっては１冊の著書として取りあげ，詳細に論究している状況と比較すれば物足りない感じがする。何といっても最晩年の短編であるというジェイムズの

著作としては小品であるために研究者が本格的にとりあげないのも当然かもしれない。

それに，この作品の与える感動に素直に身をまかせ，感銘を深めるだけで十分だという鑑賞態度が，この作品について定着すべきものだとされて改めて論究するまでもないというのが研究者の本音であるとも考えられる。いずれにしても本格的に，この作品を論究しているものが少いので，代表的で比較的本格的に論究しているものの中で，批評家が，この作品についてどう論究しているかみてみると，エドモンド・ウィルソンは「これは彼が出版した中で，最後から2番目の小説であり，疑いもなく，ジェイムズの全著作の中でもっとも美しく書き上げられた，またもっとも驚くべき展開をみせる短編小説の一つであるが，これは英国のある海辺の町の小店主と退職した家庭教師との間で起きる孤独と貧窮に充ちた一種の散文詩だったのである。」と，この作品を激賞している。それだけでなく，彼はその論文の結論として，「ヘンリー・ジェイムズが第一級の作家であり……最大の作家達と同列に批評されるべき作家である。……（彼の小説は）英米文字においては，いつの時代を通してみても，むしろ見当らない性質であり，そして，その性質を具備することができた数少ない本物の実例がヘンリ・ジェイムズの小説である。」[(3)] とヘンリー・ジェイムズが現代の世界で第一級の偉大な作家であることを言明している。

ジェイムズは自分の小説の素材をどこで得たか自ら語っている『創作ノート』で1908年12月26日の項目で「F・F夫人が古典的なタイプの良好で小品の短編小説のヒントで我々を感動させてくれる小さな地方の事柄について語ってくれた。(これは，そこに住む書店の経営者のささやかな営みについて彼女が聞いたものだった。）彼は若い女性と婚約していたが，彼女が憤慨し，恨んだように，後でそれをやめようと思った。そこで彼女は彼を婚約破棄で訴えるとおどした。彼はスキャンダルになるのを恐れて200ポンドを払うだろうという見込みを彼

（3） Edmund Wilson, p. 187.

女はつけていた。彼は払った。しかし彼がもっと払うという契約をしたために，その義務が重荷になって彼はふらふらになっていった。彼の人生は暗く，不毛になった。彼は誰かと結婚した。彼女は女中としてロンドンで仕事をみつけ，金を増やし，人生を過ごしていった。彼女は待ち続けた。彼が苦しむのを見続けた。最後に二人は再開し，結婚した。彼女は金をもち続け，彼に払い，彼を救おうとしていた。彼は最初拒絶した。しかし彼女は他の男との結婚を拒否し独身を続けた。彼はついに彼女が金をもっていることを認識し，彼女の愛を受け入れ，彼女と結婚した。[(4)]」と書いている。

この素材をジェイムズは『荒廃のベンチ』として完成した。この小説についてフィリップ・シッカーは『ヘンリー・ジェイムズの小説における愛と主体性の探求』という研究書で『荒廃のベンチ』について，おおむね次のように述べている。[(5)]

（『荒廃のベンチ』）はエリオットの『荒地』のように醜悪な行為と愛の挫折，文明の混沌，混乱，暗闇，ニューヨークとロンドンの世界で『失われた時を求めて』の主人公のように，どこにでもある疎外，過去からの逃避，ベンチには，これ以上に圧迫する孤独はない。ドットは魂が漂流するような感じで，空と海と海岸だけが，彼のうろつける空間をなしていた。彼は最初の婚約者と結婚せず，妻は死に主体性の変形をみつめる以外になく，受身で自分を卑下していた。醜悪なものがぶら下がり，おどっていた。一人で荒廃のベンチで海を見て，ほとんど毎日をすごしていた。そこにケイトが来て，彼は彼女の正体を誤解していた。ケイトは今でも彼を愛し，彼が支払った金をもち続け，孤独と貧困から彼を救おうとした。しかし彼はそれを拒絶した。彼は彼女を愛人とすることによって疎外から逃れ，自由という感情的な強さをもたなかった。再び会ったとき，彼はケイトが彼を抱くのにまかせた。彼に自立する力はなかった。彼女は

(4) Henry James: *The Notebooks of Henry James,* pp. 330-332.

(5) Phlip Sicker: *Love and Quest for Identity in the Fiction of Henry James* (New Jersey, Princeton Univ. Press, 1980) pp. 169-170.

荒廃のベンチで彼のそばにいたのである。

この論文はドットが疎外された状況にあり，ケイトが金銭という物質的な恵みだけでなく，愛という人間にとってより本質的な恵みによって彼を疎外から救い出したという感動的な物語を，その筋書にしたがって忠実に跡づけたものである。しかし最も重要なケイトの愛について論究するに至っていない。彼女の愛について考えることが筋書をたどる以上に意義のあることではないだろうか。つぎにオーラ・シーガルが，その著書『明晰な観察者――ヘンリ・ジェイムズの小説における傍観者』において，『荒廃のベンチ』について，おおむね次のように述べている。(6)

彼は『密林の野獣』(1903年刊，友人の女性に愛されていたことを彼女の死後に気づいたが，もう遅すぎ人生の無為と無情を実感する物語で愛の不毛性を語っている）と『荒廃のベンチ』を関連させて，『密林の野獣』が『死者の祭壇』及び『荒廃のベンチ』と同じ孤独，挫折，精神的空虚，精神的不毛性を扱っており，個人の運命と個人の精神的主体性を探求するというテーマを扱っている。『密林の野獣』では遅すぎたというテーマを扱っている。それは『使者たち』でも同じである。この作品は悲観主義，悲哀を扱っている。それはジョン・マーチ，ストランサム，ホワイト・メイソン，マーク・モンチス，ハーバート・ドットなどの登場人物と同じである。彼らは孤独で，自己中心的で，感受性の強い教養のある中年男性で，憂鬱(ゆううつ)で，臆病で，ひどく用心深いニュー・イングランドタイプの人間である。かれらは挫折者，つまり反ファウスト（ゲーテのファウストとして現実的な欲望の充足のために悪魔に魂を売った男と対立する存在）であり，生きなかった人生の権化である。

ここでシーガルが述べたハーバート・ドットがマーチャーと同じように疎外された孤独な教養のある憂鬱な中年男性であるという指摘は正鵠(せいこく)を射るもので

(6) Ora Segal: *The Lucid Raflector: The Obserber in Hemry James' Fiction* (New Haven and London, Yale Univ. Press, 1969) pp. 211-212.

あるといえる。しかしドットは人生を生きていないと言うことは当を得ていない。彼は恋人との婚約を破棄し，その違約金として賠償金を支払い，事業に失敗して貧窮におちいり，結婚したものの妻子を自分の所為で病死させ，再び孤独で貧困な生活を諦観のうちにおくるという人生の辛酸を味わいつくしたという人生体験をしている。

彼は挫折したが，彼なりに全力を尽して人生を生きたといえるだろう。彼が誤解を脱し，自己を客観的にみて，全てを放棄して諦観に達したからケイトの真実の姿を見直すことができたのである。彼は紳士的で高潔であろうとする矜持によって彼女の差し出した金銭を受けとることを自らに禁じた。しかし自己の現状を認識し，全てを放棄してケントがひょっとして来ていたら彼女に自分の全てをゆだねようとしたから荒廃のベンチに行くことができたのだ。彼がこのような悟りの境地に達していたから，もはやケイトの愛を拒めるような状況にないという自己放棄の心境で彼女が自分を抱きしめることに身をゆだねたのだ。結果的にハーバート・ドットは救われたのであり，ケイトの愛は報いられたといえる。ここで，ジェイムズが示唆したのはエドマンド・ウィルソンが最も早く指摘したように，ジェイムズの全著作の中で最も美しく書きあげられた作品であるという愛の力による挫折した人間の救済というテーマである。

エドマンド・ウィルソンは「アメリカの批評界を現在の高さと隆盛に導いた卓抜した批評家の一人である。」[(7)]という批評家としてのウィルソンの卓越した批評の的確さと洞察力である。まことにウィルソンの述べるように，愛による人間の救済の可能性を，その人生の最後の作品で明確に示唆したジェイムズの到達した人生観の境地がここに明示されている。ジェイムズは宗教的な境地に近い人間の愛の力を，その作品ではっきり読者に語ったと考えるのが妥当であろう。

優れた批評能力を展開してジェイムズの作品を論究する欧米や日本の研究者

(7) 『ヘンリ・ジェイムズの世界』(1962年，北星堂)，34頁に指摘された「ヘンリー・ジェイムズの曖昧性」の訳者，大津榮一郎氏の解説。

の他に，彼の作品をより自由に鑑賞する不特定，多数の読者が存在する。これらの読者は，それぞれ自分の立場で作品を読み，解釈する。その内容は読者によって千差万別である。そこで，筆者もそのような読者の一人として，自分なりの解釈を披瀝する。

まず，この作品を読んで率直に感じることは，この作品がジェイムズの短編として真に傑作というのにふさわしいものだということである。これほど感動を与え読者が素直にそれに身をゆだねることのできるものは数多い短編の中でも最高に位置するものである。ジェイムズの作品は現実の出来事が波瀾万丈のように続出するという類いのものではなく，人間の意識の展開に意義をおくものであるだけに筋書の意外な展開によって読者に感動を与えるものは少いと不満を与えがちである。しかし，この作品に限っては，その筋書だけでも人生とは何か，人間とは何かということについて改めて考えさせないではおかない劇的な要素がある。長年嫌悪し続けてきた相手が人生の全てを放棄し，ただ孤独と貧困に生きている中年男性の救い主として突然あらわれ，その救いの手を拒否しようとしても，それを受け入れる以外に意義ある人生はないと，その人が悟ったということは偉大な人間愛による生の救済が究極のものであることを示唆している。

人間の苦難の生の彼岸にある深い愛は日本でいえば仏の救いであり，欧米ではキリストの救いであり，エーリッヒ・フロムのような現世的な人間愛の重要性を主張する識者からすれば根源的な人間愛の発露である。これほどの人間愛はビクトル・ユーゴのレ・ミゼラブルのジャン・バルジャンの偉大な愛に匹敵するものである。一読者の立場からすれば，まず第一に，この偉大な人間愛に感動し，素直にそれに身をゆだねることに最大の意義があるということである。

さらに客観的にこの作品について考えてみると，これはドットのケイトに対する嫌悪と誤解に対するケイトの愛と真実の対蹠を示唆する作品だということである。ドットの嫌悪や誤解はきわめて人間的であり，人間にとって普遍的であり，人間がおちいり易い弱さの露呈である。人間社会のあらゆる場面で，お

ちいり易い誤解は人間から真実を遠ざけ，相手の人格や行動の真の姿や意味を知らず，一方的に相手が悪刺で狡猾な人間であると信じこみ，それが間違いであることは露ほども疑わず，自分の偏見と誤解によって相手を嫌悪していることがあるということである。

「沈黙は金にして雄弁は銀である」という言葉は人間の言葉の虚しさを象徴しているかのようである。天才の生涯は往々にして悲劇的であるのは一般的な人間が天才の真実の姿を誤解していることが多いことを語っている。自分のまわりを見渡しても単なる臆測や風説や無責任な噂によって多くの人を誤解し多くの人を一方的に嫌悪していることがある。無実の人を犯罪者だと決めつけて冤罪が発覚することもある。卑近な例では松本サリン事件では警察までも被害者を加害者として逮捕し謝罪するという事態が生じている。生きている間にいわれなき非難を受け迫害に近い対応を受ける人もある。これらの人を非難する人は現実にその人の真実の姿は何かということを知らず偏見と誤解によって他人を断罪する。このように真実は，真実を知る人以外にはわかりにくいものであり，誤解をうけてきた人は迫害に耐え，迫害者を赦し，それに耐え苦難を克服してゆくのである。

ドットは人間という存在が普通におかす習性的で醜悪な人間性によってケイトを誤解し，彼女を嫌悪してきた。あるいは逆にケイトを嫌悪したから誤解したともいえるかもしれない。彼はケイトとの関係を断って，婚約違約金の400ポンドを払うことを自分の紳士としての体面を保つ方法だと決意している。この限りにおいて彼は自分の非を悟り得る人間である。しかし自分の経営手腕の不足によって事業に失敗し，400ポンドのうち270ポンドは払ったものの，それ以上の支払は拒否している。経済的破綻によって妻子まで病死させなければならなかった彼の追いつめられた状況からすれば，当然である。法律でも支払能力のないものから債権のとり立てはできないことは認めている。支払能力がない者は自己破産をすることもできる。破産した者は，それ以上の負担を追及されることはない。

ドットは貧窮の極みにおちいり，どこかに勤めることによってかろうじて生きている。それでも精神的に高潔であることによって矜持を保っている。彼にとってケイトのことなど，もはやどうでもよいことであり，彼女の存在は縁なき衆生といってよい状況である。彼には人生の果てにたどりついた諦観しかない。このような状況になったから偏見や誤解から解放され，客観的に状況を理解し，真実を見極めることができたのである。彼がケイトの愛と真実を理解し，それに身をゆだめるしかないという自分の状況を理解したのは彼が体験した苦難のすえに達した心境の結果である。

一方ケイトはドットと相思相愛の関係にあると信じ切っていたから，婚約を一方的に破棄されて憤激するのも無理はない。しかし彼女はただ怒りにまぎれて違約金を要求したのではない。彼女は秘かにドットの優柔不断で行動力や決断力や経営能力の不足を洞察していた。これは企業などに勤務し，忠誠で勤勉に働いた対価として保証された賃金を得ることにより安定した生活をおくっている人にはなかなか理解できないことであるが，事業の経営というのは，それほど安定したものではない。企業を自分で経営してみると解ることであるが，事業というのは根本的には冒険である。日本の中小企業の経営者は日曜や祭日などもない気の休まらない毎日をおくり，一時的に経済的に恵まれているようにみえても，不況や経営不振は遠慮なく，おそいかかってくる。勤務者は安定した収入を得ていても経営者の収入は安定しているものではない。その一方支出の方は電気，ガス，社会保険，水道代，固定資産税，設備費，給与など削ることのできないものとして迫ってくる。その結果事業が破綻すれば責任を取って私財を全て提供し，それだけでなく自殺に追いこまれることもある。その人生はまさに苛酷であることもある。能力が目覚しく発揮され，忠誠に，愚直に業務に精励したことが評価されるというような生易しいものではない。災厄の中で孤独のうちに人々を救済する責任を必死で果すのが真の責任をになう事業経営者の本質である。

このような苛酷な状況をドットのような紳士的で高潔に生きることを旨とす

る人が楽々と克服できるようなものではない。事業経営者は時には涙をのんで不正だと自覚する業務を遂行しなければならないことさえある。ドットには，このような悪辣な業務を推進することは到底できない。ドットに経営手腕に欠けるところがあるのではないかというケイトの洞察はまさに正鵠を射たものであった。彼女が秘かに予想したとおり，彼は結婚し，幸福な生活をおくっているようにみえても，やがて古書店の経営に失敗し，妻子を病死させ，自分自身も貧窮の極みにおちいることになった。

彼女は決して，それをよろこんでいた訳ではない。彼女が余計な関与をすれば彼の誇りを傷つけるだけだということを予測し，彼の自尊心を尊重して，自分はただひたすらに自分の積極性や行動力や隠されていた事業経営の手腕を発揮して蓄財につとめ続けた。その結果ドットからもらった，というより，とりあげた270ポンドを1200ポンドに増やし，それ以外にも相当の資産を築き，ドットから手に入れて増やした1200ポンドは無条件に彼に返してやろうとしたのである。この裏には，彼女の深いドットへの愛と彼の違約をゆるす忍耐と無限に近い努力があった。それが彼女の愛の真実である。しかも彼女はドットの自尊心を尊重し，彼を傷つけないために控え目に行動し，彼が自主的に行動し，自分の努力と愛の結晶である1200ポンドを受け取らせようと知恵をめぐらし，じっと待っている。その忍耐はまさに驚異という以外にない。これほど長きにわたって自分を裏切った相手を愛し続け，努力を重ねることは，まさに人間離れのした行為である。そこにケイトの愛と真実の姿がある。日本のすぐれた精神分析学者であり，人間の生きるという行為について長年考えをめぐらし，専門的な研鑽をつみ重ね，一つの悟りの境地に達したと判断される縣田克躬は，その著書『愛について』において，愛の真実の姿を次のように述べている。

愛は，よく愛情や情愛などという言葉から察せられるように，ひとつの感情であるようにとられることが多いが，そうではありえない。愛はそのなかに信頼と受容および自己犠牲を主たる要因として包む決断的な，ある態度決定であ

る。そしてこれらの要因は，尊敬や忍耐や配慮，関心などとともに，愛を成立させるものとなっている。愛が決断であり，ある方向性をもった態度決定であることは必然に，その決定にあずかるものにおける責任をよびさますのである。

愛は愛するもの同士を，それによって連帯性を持つものとして，固く結合させるものなのである。いや，互いに生を共有することをめざす決断的な態度の決定なのである。態度を決断によって決定するとは，その連帯に対して責任を持つことである。一人の人間が彼を愛し，彼女を愛するとは，彼または彼女に対してある責任を負うことであり，そのものの「生」に私の「生」を託する冒険をあえてする勇気を持っている，ということなのである。

愛は，惜しみなく与える態度の決定でもある。もっとも愛しもっとも大切なもの，すなわち自己をその愛の対象とするものに与え，自分のうちに息づき育ってきたところのもの，自分が収得したところのものを愛するものに与える。愛するものは自分の希望を彼または彼女に託し，その「生」を共有するのである。それはひとつの大きな冒険であり，ある意味ではひとつの賭けであるというべきであろう。しかし，自分が愛する彼または彼女が自分をもまた愛するならば，その人はまた，そのもっとも大切なもの尊むところのものを自分に託することを，あえてするのである。私はここに，与えることによって君と私とをともに豊かなものとすることになる。(8)

ドットは苛酷な人生体験を経ることによって諦観という東洋の仏教的な自己放棄の立場に達していた。これは一種の悟りの境地に彼が苛酷な人生体験の末に到達したことを物語っている。その結果，彼は最終的には自分がケイトの愛に身をまかせる以外に自分を救済する方法がないことを自覚した。彼のこの境地は仏という神の愛をひたすらに信じ，念仏をとなえて神の御手に自分の全てをゆだねる仏教の他力本願の境地に一脈相通じるものがある。仏の愛にも似た

（8） 縣田克躬著『愛について――愛の生態学』（昭和43年，中央公論社）121頁―122頁。

忍耐と寛容と赦しと自己犠牲をつづけてきたケイトの愛は，人間の，人間による主体性の確立，つまり自己の確立によって愛する者を救済するという現実的な姿を示唆している。彼女は人間としての実際的な行動によって愛の力の強さや大きさや深さを実証してみせたのである。それはジェイムズが最後に到達した信念の披瀝であるとも考えられる。彼は，その作品の最後に愛の理想の姿を詩のように謳ったのだ。ジェイムズは欧米人であり，キリスト教徒であったから東洋の仏という神の愛については自覚していなかっただろう。しかしキリスト教においても愛の姿は同じであり，それがどのようなものであるかはキリスト教徒は殆ど全ての者が熟知している。それは新訳聖書のコリント前書第13章の愛についての教えに示されていることは殆んど誰でも知っているキリスト教の真理である。(9)

たとい，私が人の異言や，御使いの異言で話しても，愛がないなら，やかましいどらや，うるさいシンバルと同じです。

2　また，たとい私が預言の賜物を持っており，またあらゆる奥義とあらゆる知識とに通じ，また，山を動かすほどの完全な信仰を持っていても，愛がないなら，何の値打ちもありません。

3　また，たとい私が持っている物の全部を貧しい人たちに分け与え，また私のからだを焼かれるために渡しても，愛がなければ，何の役にも立ちません。

4　愛は寛容であり，愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず，高慢になりません。

5　礼儀に反することをせず，自分の利益を求めず，怒らず，人のした悪を思わず，

6　不正を喜ばずに真理を喜びます。

---

(9)　『新訳聖書，コリント前書第13章　愛について』

7　すべてをがまんし，すべてを信じ，すべてを期待し，すべてを耐え忍びます。

8　愛は決して絶えることがありません。預言の賜物ならばすたれます。異言ならばやみます。知識ならばすたれます。

ケイトの愛はコリント前書の教える「すべてを信じ，すべてを望み，すべてに耐える」という愛の本質を人間として体現したものであり，ジェイムズは自己の愛の理想を宗教的な高みをもつものと相通じるものとして自分の小説で表現した。

一人の人間を徹底して愛した人は自己と他者をともに救済できることを人間の現実的な姿によって示そうとしたジェイムズの立場がここに示されている。これが，この小説のドットのケイトに対する嫌悪と誤解に対するケイトの愛と真情の姿である。愛がいかに忍耐強く，寛容であり，赦し続けても，その真実を知ることは生身の人間には困難であり，この世間は誤解にみちていることをジェイムズは語っている。しかし，ひとたび愛と真実が理解されたときはドットのように救済されることができる。まことにケイトの愛は人間離れのした美しいものだとしか言いようがない。現代社会の資本主義が蔓延した状況のなかでは物質主義や拝金主義がはびこり，人間は疎外されるというエーリッヒ・フロムの指摘の的確さには首肯せざるを得ないものがある。(10) これは，この小説の本当のテーマは貧困と孤独にあって社会から疎外されているドットにあるのではなく，彼を救済する愛の力をもったケイトにあるというのが真実の姿である。しかし，ジェイムズはドットの視点から，この物語を展開し，真実は巧みに読者に悟られないようにしている。ここにジェイムズ一流の自分の示唆の本質を理解できる読者にしか打ち明けようとしない潔癖な作家の姿がある。それほどジェイムズは深い意味を，この作品にこめた人間の心の追求について生涯をさ

(10)　エーリッヒ・フロム著『愛するということ』(1969年，紀伊国屋書店)

さげた真摯な作家であるということであろう。